

僕の彼女は
処女ビッチ
生徒会長!?

立ち読み版

小説 上田ながの
挿絵 ぎうにう



一章

再会!! 初恋のあの子はビッチ生徒会長!?

二章

あたしと……する?

三章

最初にセがつく四文字のプレゼント

姫ちゃんの気持ち

四章

幸せな時間

終章

僕だけのビッチ生徒会長

登場人物紹介

Characters



つるはしひめ

鶴橋姫

祐馬の幼馴染みの少女。面倒見がよく明るい性格で、男女ともに生徒から慕われている生徒会長。学業もトップクラスの成績で教師からも信頼されている。

かみさきゆう ま

上崎祐馬

幼少期に仲の良かった姫に想いを寄せる平凡な少年。姫の通う進学校に編入するためにひたすら勉強の毎日を送ってきた。

二章 あたしと.....する？

二章 あたしと……する？

「どう？ 水着、似合ってる？」

生徒会室の出来事から数日後の水泳の授業にて——スク水姿となった姫が、祐馬に対して自分の身体を見せつける様なポーズを取って見せてきた。

左手を腰に、右手を頭の後ろにした上で、胸を突き出し、腰を曲げるというモデルみたいな姿勢である。大きな胸が、キュッと引き締まった括れが、プリッとしたヒップが、強調される様な体勢だった。

しかも、しかもである。

そんなポーズを取る姫が身に着けているスク水は、ただのスク水とは違うものだった。デザイン自体は普通のスク水と変わらない。だと言うのに、他の女子達が身に着けているものと比べると、なんだか小さい様に見えた。本来姫が身に着けるべきサイズよりも一回り下の様に思える。

そのせいか、胸や腰の肉がなんだかはみ出している様にも見え、とてもエッチな感じがしてしまった。

そんな肢体を恥ずかしがることなく見せつけてくる。

「あ……その……えっと……」

正直見ていられない光景だった。ただでさえ姫を見るだけで生徒会室の一件を思い出して興奮を覚えざるを得ないのに、更にこれである。

姫はあの日のことを気にしていないのだろうか？

などということを考えつつ、慌てて視線を逸らす。

これから水泳の授業だつて言うのに、勃起してしまいかねない状況だった。

「ねえ、どう？ 感想言つてよお」

けれど、姫は視線を逸らした先に移動し、より自分の身体を見せつけてくる。

「似合ってる……。凄く似合ってるよ」

姫を満足させるには、そう言わざるを得なかった。実際似合ってはいるし……。

「んふふ、そっか、似合ってるか。ありがとね♪」

嬉しそうに姫は笑う。その顔は——やっぱり見惚れそうになるくらい可愛いものだつた。やっぱり自分は姫が好きなんだと改めて認識させられもする。

ただ、好きなんだけれど、ギャルっぽくなっても本当に可愛いものだけ——

「でも、どうしてあたしから目を逸らすの？ もしかして、この格好……ちよつと刺激的すぎたかしら？」

なんてことを言いながら胸の谷間を強調する様な姿勢を取ってくる様などところかには、本当に困ってしまう自分がいた。

性的なことに對してあまりに明け透けすぎる。

思わずゴクツと息を呑んでしまう。

「あ……今息飲んだ。もしかして、興奮しちゃった？ またこの間みたいに勃起でもしちゃった？」

囁く様に問いかけてくる。それどころか耳にフウツと息まで……。

「おわああああつ!!」

思わず声を上げ、慌てて姫から距離を取った。

「あはは、祐馬慌てすぎい」

ケラケラと楽しそうに姫は笑う。

とても楽しそうな姿だった。見ているとこつちまで笑いたくなるくらいに……。

でも、同時にちよつと思ってしまう。こんな風に自分の身体で男をからかうなんて、やつぱりビッチなのかな——と。

「凄いな鶴橋……。ホントエロい」

「あんなビッチと同じクラスになれてよかった。最高に目の保養になる」

「いやいや、水泳の時間にアレはヤバイだろ。事実俺……ヤバイぞ」

実際クラスメート達は完全に姫をビッチギャルとして見ていた。

ヒソヒソと話しつつ、鼻の下を伸ばしながら姫を見る。中には明らかに腰を引いた体勢を取っているものまで……。

（あ……あんまり見るな！ 姫を見るなあああつ!!）

なんて叫び声を上げなくなる状況だった。

*

「どう？ 水着、似合ってる？」

ん？ なんだこの光景？ デジャブ？

放課後——またしてもスク水姿となった姫が、昼間とまったく同じポーズを取って見せてきた。

「だからその……水泳の時も言っただじゃん」

「そうだけさあ。もっかい。ねえ、お願い」

こちらの手を取り、ギョツと乳房を強く押しつけてくる。ムニユツと潰れる乳房の柔らかな感触が生々しい。頭がクラクラするのを感じつつ、慌てて姫から離れようとする。

「だーめ。ちゃーんと水着の感想言ってくれるまで放さないんだから」

しかし、姫は逃亡を許してはくれない。

それどころか更に強く乳房を押しつけてくる。

「だ……だからその、似合ってるよ。凄く……可愛い」

「えへへ♪」

嬉しそうに笑いつつ、更に強く腕を——

「って、放す約束だろ！」

「もう、はいはい」



などとちよつと不満そうにしつつも、一応姫は腕を解放してくれた。

「本当はもつとギョツとして欲しいくせに」

確かにそれはそうだけど……。

「つて！ そんなことない！ そ、それより生徒会の仕事しないとだろ！」

因みに仕事というのはプールの見回りである。

現在学園は中間試験の準備期間中であり、部活などの放課後活動は原則禁止になっていた。が、学生の中には部活に命をかけているものも多い。というワケで、試験期間中であっても隠れて部活をしているものも結構な数いるのである。

その取り締まりも生徒会の仕事だった。

（生徒会の試験勉強はどうなるんだって話だけど……生徒の自主独立云々つてのが建て前なんだろうなあ）

などということを考えつつも、実際試験に関してはあまり心配してはいない。

伊達に超難関編入試験を突破してきたわけではないのだ。でもつてその辺は姫も同様のしい。話によると姫は常に学年トップスリーに入るほどの成績らしい。流石だ。

「む……仕事か。それじゃあ仕方ないわね」

見た目は変わっても与えられた仕事に対する責任感が変わっていないらしく、納得した様子で姫はプールサイドを歩き始めた。

プール周辺から更衣室、シャワー室まで、生徒達が隠れていないか一通り見て回る。

（別に二人でする様な仕事じゃないよな。第一、水着に着替える必要もないし。でも、姫に付いて来てって言われちゃったら断ることなんかできないよなあ）

などということを考えながら……。

「あ、いたいた、会長！ ちよつといいですか？」

その途中、制服を身に着けた女生徒数人がプールへと入ってきた。

「ん？ なに？ あたしに何か用？」

足を止め、首を傾げる。

「その……ちよつと相談に乗って欲しいんです。会長ならいい答えをくれるかなって」

「相談？ どんなの？ あたしに答えられることならいいけど」

「ありがとうございます。実は……」

そう言うのと女生徒の一人は、チラッと祐馬を見つめてくる。

「あ、もしかして邪魔？」

「……すみません」

「いいっていいって」

異性には話しづらいということもあるだろう。

「ゴメンね」

申し訳なさそうな表情を浮かべて見せてくる姫に対して「大丈夫だよ」と言って笑いかけてやりつつ、祐馬は女子達から少し距離を取った。

「ありがとうございます。参考にしますね」

それから大体三〇分ほどした頃、女子達はそう言つて姫に頭を下げ、プールから出て行つた。悩みは解消されたのだろうか？

「待たせちゃつてゴメンね」

「いや、別に。でも、何の話だったの？　つて、折角内緒にしてたのに聞いちゃつたら不味いかな」

「んー。そんなこともないよ。その、ほら、よくある恋の相談つて奴？　好きな男子がいるんだけど、どんな風にアピールしたらいいか分かんないつて。だからあたしに教えて欲しいつてさ」

「え？　あ、そうなんだ。その……そういう相談つてよくされるの？」

「うん。まあねえ。相談しやすいのかなあたしつて？　どう思う？」

「どうつて……それは……そ……そうなんじゃない」

と答えつつ思う。

女子達も姫が経験多そうだつて思つてゐるからなんだろうなあ——と。でも実際のところはどうかだろう？　まだ分からない。まだ……。

「あのさ……それで、姫ちゃんはなんて答えたの？」
恐る恐る問う。

「なんてって、そんなの簡単よ。男なんて色仕掛けすればイチコロだってね」

すると姫はエッヘンと胸を張ってそう答えてきた。

「い……色仕掛けっ!!」

一瞬硬直してしまう。

「そういうこと。もつと分かりやすく言えば、男なんてやつちゃえば一発だってね」

「やつちゃうって……え……な……何を？」

あまり答えは聞きたくないけれど、聞かずにはいられない。

結果、返ってきた答えは――

「なにつて、そんなのエッチに決まってるじゃん」

最も聞きたくないかったものだった。

「え……エッチって……」

頭の中が真っ白になる。すべての思考が飛んでしまいそうだった。

「祐馬だつてエッチな女の子が目の前に現れたら、一発で好きになっちゃうでしょ？」

「それは……その……」

実際自分はエッチな女の子である姫が好きなの……。いや、でも、姫がこんな風にエッチになる前から好きだったわけだから、それも違う様

な。いや、でも、しかし……。混乱する。頭の中は滅茶苦茶だった。姫の言葉に何と答えればいいか分からない。

だからだろうか？ そんな風に混乱してしまったせいだろうか？

「それって……つまりさ……ひ……姫ちゃんはまだ男子とエッチしたってこと？」
気がつけばそう口にしてしまっていた。

「え？」

一瞬姫は動きを止める。

「あ……その……ご……ゴメン。変なこと聞いちゃった」

幼馴染みの反応に正気に戻る。

慌ててなんでもないと首を横に振った。

けれど姫はしばらく何かを考える様な表情でこちらを見た後――

「あつたり前でしょ」

なんて答えてきた。

「へ……当たり前？」

「そうよ。今時あたし達みたいな歳で処女とかあり得ないって。祐馬だつてしたことくらいあるでしょ？」

きわめて当然のことに様に聞いてくる。

「したことくらいって……そんなの……な……ないよ」

していた。既に姫はエッチを……。つまり、やっぱり噂どおりのビッチだった？

そんな事態に頭を強く殴られたみたいなのショックを受けながら、祐馬は嘘をつくことな

く正直に答えた。

「ないって……ホントに？ 童貞ってこと？」

「……う……うん……童貞だよ」

見栄を張ったって仕方ない。コクツと頷いた。

「ふうん……そっか……そうなんだ。祐馬は童貞なんだ。祐くんは童貞……」

この答えに対し、心なしか嬉しそうな表情を浮かべつつ、噛み締めるように童貞童貞と呟いてくる。

「ちよっ！ そ、そんなに繰り返さなくていいだろ」

流石に好きな女の子に童貞童貞繰り返されるのは辛い。

「あ、ゴメンゴメン」

やっぱりどこか嬉しそうに、姫は謝罪してきた。

その上で――

「それならさ……その……お詫びと言ったらなんだけどさ、もしよかったらあたしと……する？」

なんてことを尋ねてきた。

「……………は？」

先程まで以上の驚きを覚えてしまう。目が点になった。

今自分が聞いたのは幻聴か？

興奮が膨れ上がっていく。

(もっと……もっと……もっとももっともっとな!!)

止まることのない想いが心の中を支配していく。

より強く抱き締め、更に口内をかき混ぜる。

姫の歯の一本一本を舌尖でなぞり、口腔粘膜をねつとりと舐め回した。その上で舌に舌を絡み付けていく。下唇を軽く咥え込み、チュウウウツと音を立てて啜った。

「んっふ……んんっ……むっふ……んっんっんっ……」

舌を蠢かせるたびに、ヒクッヒクッと幼馴染みは肢体を震わせる。祐馬に負けじとこちらを抱き締める手に力も込めてきた。

その上で、ゆったりと自分から舌も蠢かせてくる。祐馬の舌に舌を絡め、チュウウウツと吸引行動まで行ってきた。

ただ、その動きはどこか硬く、ぎこちない。キス慣れしている様な感じではない。が、それを気にしている余裕なんか祐馬にはなかった。

姫が自分から舌を動かしてくれる。大好きな子が、自分の唇を吸ってくれている——これほど嬉しいことはない。

もっと感じたい。もっと姫を……。

キスしかしていかないと言うのに、どうしようもないほどに股間が熱くなっていく。勃起を抑えることなんかできなかった。

「んっふ……むふううっ……。ちゅっぱ……。んふううっ……。はあっはあっはあっ……」

そんな祐馬から、姫の方が先に唇を離してきた。

ツプツと唇と唇の間に、唾液の糸が伸びる。

「あっ……」

まだキスしていたい——とでもいう様な、物足りなげな声を思わず漏らしてしまう。

「もう……そんな声出さないの。わ……分かってるからさ。祐馬があたしともっと……その……キスしたがつってることくらい。だけどね……でも、もっと……もつとしたいこと、あるんじゃない？」

そんな祐馬に対して瞳を潤ませながらそう伝えてきたかと思うと、姫は躊躇することなく祐馬の股間に手を添えてきた。

「うああっ」

ズボンの上からではあるけれど、痛々しい程に勃起した肉槍に触れられてしまう。思わず声を漏らし、反射的に肢体を震わせてしまった。

「ふふ……凄く硬くなってる。ズボンの上からでもハッキリと分かるくらい」

こちらの見せた反応に嬉しそうな表情を浮かべつつ、姫はただ肉棒に触れるだけではなく、ゆつくりと手を動かし、ズボン越しに、勃起したペニスをゆつたりと指先や掌で撫で回し始めて来た。

「うっく……くううっ」

ほんの少し手を動かされるだけで、射精してしまいそうな程にペニスが昂ってしまう。

「ビクビク震えてる……。こんなになるくらい……。あたしとしたいんだ……」

「あああ……し……したい。姫ちゃんとしてほしいよ。大好きな姫ちゃんと……。え……。エッチ……したい」

「……大好きって……。ば……。馬鹿っ」

大好きという言葉に、照れくさそうな表情を浮かべる。

浮かべつつ――

「んっちゅ……。んんんっ……」

自分から再びキスをしてきた。

もちろん、ただ唇を重ねてくるだけではなく、舌も挿し込んでくる。しかも、それだけでは終わらず、躊躇うことなく祐馬の身体を床に押し倒してきた。

「んっふ……。はふうう……。はあっはあっはあっ……。あたしからの誕生日プレゼント……。しっかり受け取ってね」

再び唇を離してそう伝えてくると共に、姫はこちらの下半身に手を伸ばすと、そうすることが当然とでもいう様に制服ズボンを脱がせてきた。ただし、なんだかその動きはぎこちがない。

「だ……。大丈夫？」

「だだだ……。大丈夫よ……。これくらい！」

思わず声をかけた祐馬に対し、少し焦った様な声を漏らしつつ、姫はこちらのズボンだけでなく、下着まで脱がせてきた。

ビヨンッと痛々しい程に勃起した肉棒が剥き出しになる。

「……相変わらず大きいね」

肉茎に幾本もの血管を浮かび上がらせながら打ち震えるペニスを見つめ、ホウツと熱い吐息を姫は漏らした。

「こんなに大きくするくらい、あたしとしたいんだ」

「うん。そうだよ」

否定なんかできない。素直にキモチを伝える。

「そっか……ふふ……ありがと」

嬉しそうな表情を姫は浮かべた。浮かべつつ、自分のスカートの中に手を入れる。そのままゆつくりと赤い色のショーツを下ろして見せてきた。

「ねえ……あたしのここ……見たい？」

スカート裾を手に取りながら、挑発するような表情と言葉を向けてくる。

「うん……。見たい。見たいよ」

否定なんかできなかった。

「いいよ……見せてあげる」

素直な求めに姫は応じてくれる。

興奮を感じさせるような表情を浮かべつつ、そっとスカートを捲り上げてきた。白い肌が、プリッと張りのあるヒップが、そして、薄めの陰毛に隠された肉花卉が剥き出しになる。

「どう？ あたしのここ……凄く濡れてるでしょ」

姫のその言葉どおり、剥き出しになった秘部は既に愛液に塗れていた。

秘裂は左右に開き、ピンク色の肉花卉が剥き出しになっている。ヒダヒダの一枚一枚が、まるで呼吸でもするかのように蠢いているのを見て取ることができた。

「ホントだ。凄く濡れてる。それ……キスだけで？」

「そうよ。祐馬と一緒に……キスだけでおちんちん……こんなに硬くしちやったみたい……あたしも……おま○ここंनाに濡らしちやったの。祐馬とエッチしたいって……身体が熱くなっちゃってるの」

「僕とエッチしたい」

姫の声が脳髓にまで染み込んで来る。聞いているだけで射精してしまいそうな程に興奮が高まっていくのを感じた。

「僕もしたい。姫ちゃんになりたいよ」

「分かってる。だから、いくね」

言葉と共に、プールの時と同様に祐馬の身体に跨がってくる。左手を伸ばし、そっとペニスに添えてきた。指を肉棒に絡めてくる。

ただ触れただけだと言うのに、堪らない程に心地いい。ビクッビクンッビクンッと、暴れ馬のように肉棒を跳ね回らせてしまう。

これに対して姫が口にしたのは――

「すごい元氣。これが……こんなのが……あたしの膣中に挿入る……。挿入っちゃうんだね……」

こんな大きいものが自分の膣中に挿入るなんて信じられない――とでも言いたげな言葉だった。

「姫ちゃん？」

何でそんな初めてみたいな反応をするんだろう？　ちよつと戸惑ってしまう。

「ん？　あ……なんでもない。なんでもないわ。その……ゆ……祐馬は初めてなんですよ？　だから安心して。全部あたしに任せてくれればいいからね♪」

疑問に対し、あははつと姫は笑顔を浮かべて見せてきた。どこか誤魔化し笑いにも見える笑みを……。

けれど、そのことをそれ以上突っ込むことは祐馬にはできなかった。

何故ならば――

「んっく……あんっ……」

姫が腰を下ろしてきたから……。

グチュッと勃起した肉先に、濡れそぼった秘部を密着させてきたから……。

「あうううっ！」

肉先に濡れた肉襷が吸い付いてくる。ペニスの先端部に伝わってくる生温かな秘部の熱気に、ビクビクと屹立が震えた。

その震えに反応する様に、密着部分からドロツと愛液が溢れ出してくる。まるで花が蜜を分泌させる様に……。

「す……ごい……これ……出ちゃう。触っただけで……出ちゃいそうなくらい、気持ち……いいっ」

「駄目よ。本番はここからなんだから……我慢してね」

その言葉と共に――

「んっふ……あっあっ……あううううっ!!」

姫は更に腰を下ろしてきた。甘みを含んだ吐息を漏らしつつ、濡れそぼった肉壺で、龟头を咥え込んで来る。膣口を押し開き、襷の一枚一枚を肉茎に絡み付けながら……。

狭く、きつい穴に龟头が包み込まれていく。肉先が握りつぶされてしまうのではないかとさえ思える程の締めつけだった。いや、きついだけではない。肉棒を包み込んでくる柔肉の感触は柔らかささえも感じさせる。ペニスが溶けてしまいそうなくらいに……。

「すごい……。これ……が……我慢できない。こんなの耐えられない」

「はああああ……挿入って来る。祐馬が……あたしの……膣中に……んっふ……んんんっ……挿入って来るのが……わ……分かるわ……。あっあっあっ」

嬌声を漏らしながら、肉棒をより蜜壺で咥え込んでくる。亀頭だけでなく、肉茎まで柔肉の海に沈めてくる。

ぐっじゅ……じゅずぶっ……。ぬじゅううっ……。

挿入に比例する様に膣口が広がっていった。それに対し、膣壁は更に収縮し、これまでに以上に強く肉棒を締めつけて来る。挿入しているのはあくまでもペニスだけでしかないと言うのに、まるで全身を姫に強く抱き締められている様な感覚を覚えた。

その感触の堪らない程の心地よさに、ただでさえ限界近くにまで膨れ上がっていた射精衝動がより膨張してくる。

「んんん……あつふ……くふううっ……あつあつ……こ……これ……凄い。んっふ……はふううっ……。分かる……。あたしの……な……膣中で……おちんちん……祐馬の……祐くんのおちんちんがビクビクッて……震えてる……。あつあつあつ」

性感を証明する様に、肉棒が痙攣を始めた。射精したい。肉汁を沢山姫の膣中に流し込みたい——とでも訴えるかのように……。

「これ……んっく……はああああ……だ……出しそう？ 祐くん……射精しそうなの？ 挿入れた……あたしの……あつあつ……あ……たしの……膣中に……挿入れただけで……出しちゃいそうなの？」

これに姫が気付く。はあはあと荒い息を吐きながら、熱感籠もった声でそう囁くように問いかけてきた。

「うん。出しそう。抑えられない」

いつ暴発してしまってもおかしくなくくらいに、亀頭が不気味な程に膨れ上がっていくのが分かる。

「そっか……でも……んっく……あと……あと少し待って……。もう少し。はぁっはぁっはぁっ……もう少しで全部挿入るから……。祐くん全部があたしの膣中に……。だからもう少しお願い……。あたしの……あたしの奥で祐くんを感じさせて……。今日は大丈夫な日だから……。あたしの……。あたしの奥で出して」

「奥で……。う、うんっ！ 奥で出すよ！ 姫ちゃんの奥でっ!!」

姫の膣奥で射精したい。姫の膣中を自分のもので満たしたい——幼馴染みの言葉に、そんな欲求が膨れ上がって来る。だから耐える。我慢する。まだ出したりはしない。必死に射精衝動を抑え込む。

「あっく……。奥……。祐くんのを……。あたしの……。ふううっ……。あ……。たしの……。奥で……。もつと……。もつと奥で……。んっんっ——んんんっ!!」

何故かどこか辛そうな、切なげな表情を姫は浮かべた。

それと同時に、ズンッと一気に腰を落としてくる。

「あっく……。くふうううっ」

キュウウツと背中を弓形に反らす。同時に肢体を戦慄くように震わせた。この震えに合わせるかのように、ただでさえきつかった蜜壺がより収縮してくる。ギュウウツと肉壺全



エッチな格好をした恋人が求めてくれている。ペニスが欲しいと訴えてくれている。その姿を見るだけで、達してしまいそうなくらい興奮が高まっていくのを感じた。この求めに応じてやりたい。思いつきり姫の肉壺を犯したい——そんな感情が膨れ上がってくる。

ただ、同時に、もつと見たい。もつとエッチな姫を見たい——などという欲望までムクムクと鎌首をもたげてきた。

「そっか……欲しいか。だったらさ……また前みたいにして」

「前みたい？」

こちらの言葉の意味が分からなかったのか、小首を傾げてくる。

「その……ほら、恋人になる前、僕に自分からエッチなことをしてきた時みたいな……ビッチな姿を見せてよ」

「え？　なんでそんな」

「何かその格好凄くエッチだからさ。ああいう姫ちゃんもいいなっと思って」

「あんなこと……も……もうできないわよ！　あたし……本当はエッチな子なんかじゃないって何度もいつてるでしょ？」

「だったらお預けだけどそれでいいの？」

「そ……それは……」

困った様な表情を浮かべる。その顔は今にも泣き出しそうにさえ見えるものだった。

その状態でしばらく姫は黙り込み——やがて「もう……本当にイジワルなんだから」などという言葉を呟きつつ、テーブルから降りると、祐馬と向き合う様な体勢を取ってきた。「……こんなこと……祐くんだからするんだからね」

一言呟くと共に顔を寄せ、チュツとキスをしてくる。ただのキスだけではない。

「んっむ……もむうっ！ むっじゅ……んじゅうっ！ ぐっちゅ……ふじゅうっ……くちゅるっ……んっちゅ……むちゅるるる……」

舌を挿し込んでくる。グチュグチュと祐馬の口腔を貪りながら、こちらの身体を置かれていたパイプイスに座らせた。

その上でより激しく舌を蠢かせてくる。まるでそこだけ別の生き物の様に舌をくねらせながら、こちらの口腔を滅茶苦茶にかき混ぜてきた。舌に舌が絡み付く。ジュールジュールと卑猥な音色を奏でながら、唾液を吸り上げてくる。そのキスの激しさに、ギツギツとパイプイスが激しく軋んだ。

初めてこうしてキスをした時もそうだったけれど、ただ舌と舌を絡み付けさせるというだけの行為のはずなのに、思考が麻痺してしまいそうな程の心地よさを感じた。

「く……うううっ」

自然と声を漏らし、腰を跳ねるように震わせてしまう。ズボンの中で更に肉棒が大きくなっていくのを感じた。

「はああああ……。んふふ……。凄く……。お……。大きくなってるよ」

唇を離すと共に、まだぎこちなさはあるものの、ちょっと楽しそうな表情を浮かべつつ、ズボンの上から肉棒に手を添えてきた。

もちろん触れるだけでは終わらない。そのまま擦り上げてくる。ゆったりとした手つきで、肉棒をシコシコと撫で回してきた。

「どう？ 気持ちいい？」

こうして肉棒を姫に撫で回されるのは一体何度目だろうか？ 分からない。もう数え切れないほどこういう行為をしてもらっている。

だからこそ気付く。初めてした時——してもらった時は、本当にぎこちない手つきだったんだなということに。本当にあの時姫は、自分を喜ばせようと一生懸命だったんだなと改めて認識する。

そこまで想ってもらえていたことが嬉しい。この世で自分以上に幸せな人間はいないんじゃないか？ とさえ思える程に……。

そんな強い喜びが快感に変わっていく。まだズボンの上から撫でられているだけでしかない。それなのに、暴発してしまいそうなくらいの射精衝動がわき上がってくる。

「凄く震えてる。ズボンの上からでも分かるくらい。出そうなの？ もしかして祐くん……まだ擦ってるだけなのに、射精しそうなくらい感じちゃってるの？」

「それは……その……」

祐馬にだってプライドはある。

ちよつと刺激されただけで達しそうになっている——などとは答えられない。
が、誤魔化したところで姫には気付かれてしまう。

「やっぱり出そうなんだ」

再会した時の様な小悪魔みたいな笑みを浮かべて見せてきた。

「ちよつと撫でただけなのに、出そうに……ふふ、何か色々あたしにしてきたのに、祐くんも案外チョロいんだね」

「ちよ……ちよろっ——」

流石に聞き捨てならない言葉である。

「そ……そんなことないよ！ 別にで……出そうになんかなってないし」
だから慌てて強がって見せる。

「本当かな？ これでも？ こんな風にされても？」

祐馬が感じていると言うことで自信を持ったのだろうか？ 戸惑いやぎこちなさの様なものを消し、肉棒に対して更に愛撫を行ってくる。

どこをどう弄ればこちらが感じるのか？ それを観察する様な表情を浮かべつつ、シコシコと肉棒を幾度も幾度も擦り上げてきた。

しかも、ズボンの上から刺激してくるだけでは終わらない。カチャカチャとベルトを外し、ズボンを器用に脱がせてきたかと思うと、当然の様に下着も下ろしてきた。
ビヨンッと跳ねるようにペニスが剥き出しになる。

「いつもより大きくなってるみたいに見えるよ。おちんちんの先からも汁が溢れ出てきてる。やつぱりイキそうなんじゃない？」

「ち……ちがつ——くううつ」

否定の言葉を口にしようとした途端、ギュッとペニスを直接握られてしまう。思わず呻く様な声を漏らし、ペニスだけでなく全身をビクビクと震わせた。

「何が違うの？ ほら……ほら♪」

祐馬が感じる姿に喜びを覚えているらしく、エッチな行為に対する躊躇いみたいなものがなくなっていく。

それどころかどこか楽しそうな表情さえ浮かべつつ、掌が先走り汁に塗れることも厭わずに何度も何度も肉棒を擦り上げてきた。

ぐっじゅぐっじゅぐっじゅっ——。

粘液に塗れた掌が敏感部を刺激してくる。生温かな掌で肉茎を撫でられると、それだけで背筋がゾクゾクとしてしまう。精液を吐き出したい。撃ち放ちたい——とでも訴えるみたいに、尿道口がパクパクと蠢いた。

「すっごく反応してる。ねえ……もつと気持ちいいことして欲しい？」

肉棒の反応を確認しつつ、そんなことを尋ねてくる。

「それは……その……」

なんだかこのまま姫の言うがままになるのも癪しやくだった。ほんの少し前までは、自分が主

導権を握っていたのに、あっさり逆転されてしまう様な気がして、認めたくない。

でも、そんなプライド以上に――

「うん……して欲しい」

姫にエッチなことをして欲しいという気持ちが勝り、気がつけば祐馬は頷いていた。

「祐くん素直だね。それじゃあ……こんなのは……どう？」

ちよつと姫は考える様な素振りを見せた後、祐馬の前にしゃがみ込んできた。フェラチオでもしてくれるのだろうか？　なんてことを考える。

でも、それはハズレだった。

姫がしてくれたのはフェラチオではなく――

「んつく……くうううっ」

パイズリだった。

胸元を隠す衣装は身に着けたまま、深く、温かい胸の谷間で肉槍を挟み込んでくれる。

「あああ！　す……凄いつ!!」

柔らかな肉の海の中にペニスが沈み込んでいく様な感覚に、思わず愉悅の声を漏らしてしまった。

蜜壺や肛門の精液を搾り出そうとしてくる様なきつい感覚とは違う。伝わってくるものは、柔らかく、絡み付いてくる様な感触だった。

「祐くん気持ちよさそう。おちんちんも……ふふ、すっごい跳ねてるよ。あたしのおっぱ

いの中で……♥ まだ挟んだだけなのに、気持ちいいの？ あたしのおっぱいで感じてるの？」

肉棒を挟み込んだまま、上目遣いで尋ねてくる。

「ああ……いいよ。気持ちいい」

否定することなんかできなかった。素直に性感を口にする。

「そっか……ふふ……。何か嬉しい。もつと……もつと気持ちよくしてあげるね♥ 確か、その……男の子ってこういうのが気持ちいいんでしょ？」

エッチな女の子になろうとしていた頃に勉強したのだろうか？ ただ挟み込むだけではなく、上半身をくねらせてくる。自分の乳房に両手を添え、強くペニスを左右から圧迫しながら、ぐっじゅぐっじゅぐっじゅと乳房全体を使って肉槍を抜き上げてきた。

しかも、視覚でも興奮を誘おうとしているのか、胸元の衣装を捲り上げ、張りのある乳房を剥き出しにして見せてくる。豊かな乳房にペニスが沈み込む様が実に淫靡に見えた。

「うくうう！ 溶けちゃう。これ……僕のが溶けちゃいそうだよ。こんなの……くあああ！ が……我慢なんかできないよ」

この世で一番大切な恋人の胸でペニスを挟み込まれる——はつきり言ってそれだけでも射精してしまいそうな程の興奮を覚える状況である。なのに、それだけでは終わらず、肉棒を激しく抜き上げられもする。耐えられるはずなかなかかった。

ほんの数度擦られただけで、これまでの我慢なんか吹き飛んでしまう。抑えがたい程に

射精衝動が膨れ上がってくる。

「いいよ……出しても。ううん……出して……あたしの胸で……ビュッビュって熱い汁……たくさん出して……んっんっんっんっんっんっ」

ぐっじゅ！　ぬじゅううっ！　ぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅつ……。

その射精衝動を後押しするみたいに、姫はより大きく上半身をくねらせてきた。しかも、それだけでは終わらない。

乳房の間から顔を覗かせる亀頭に唇を寄せてきたかと思うと――

「むっちゅ……んちゅうっ……」

躊躇なく口唇を押し当ててきた。

チュッチュッチュッチュッチュッと亀頭に繰り返しキスをしてくる。

「んっも……もむううっ！　もっもっもんんっ」

その上で口唇を開き、肉先を咥え込んだきた。

舌を尿道口に這わせてくる。頬を窄め、ジュールジュールと肉先を吸い立ててくる。肉茎を

乳房で挟み込み、扱きながら……。

「す……ご！　や……ばいっ！　これ……ヤバすぎる！　無理……姫ちゃん……出る！

もう……で……るよおおおっ！」

パイズリにフェラチオ――どちらか一つでも十分すぎるほど心地いいのに、それが二つ同時に敏感部を襲ってくる。最早自分の意思でどうにかできる様な状況ではなかった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!